

サミュエル・ジョンソンの思想： その分析と再構成

——学問について——¹⁾

石 井 善 洋

(受付 1998年10月12日)

学問——ジョンソンの用語では、知識の獲得——に励むことは、はたして人間の生にどのような意味をもつのか。ジョンソンは、『ラセラス』(*Rasselas*, 1759)の中で、イムラックに言わせている。「みな心の中で知識をふやしたいという自然な願望を感じている。だから、知識はたしかに悦びを得る手段のひとつだ。無知とはたんなる欠如のことで、そこからは何も生まれない。それは魅惑するものがなくて、魂がよどんで動かなくなった虚無の状態のことだ。なぜかは分からないが、われわれはいつも学べばうれしく、忘れれば悲しい。だから、私はこのように結論したい、もし何ものも学問の自然な結果を相殺しなければ、われわれは、精神がより広い視野を得るにつれて、幸福になる、と」(chap. XI, XVI. 49)。また、ジョンソンはこうも言う、「知識欲は人間の生まれもった感情で、心が墮落していなければ、誰でも知識を得るために持ち物のすべてを捧げたいと思うものだ」(*Life*, 324)と。

知識を獲得することは、精神の視野を広げることである。また、知識欲は人間の本質的な欲望の一つなので、知識の獲得は幸福の追求にも等しい。

1) ジョンソンの著作のうち、*The Rambler*, *The Idler*, *The Adventurer*, *Rasselas* は *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson* をテキストとし、*The Rambler* を *R*, *The Idler* を *I*, *The Adventurer* を *A* と略記して出典を示す。文中に (*R*. 43. 2, III. 232) のようにあるのは、*The Rambler*, No. 43, paragraph. 2; *Yale Edition*, Vol. III, p. 232 の意味である。また James Boswell 著、*Life of Johnson* は、Oxford UP の *The World's Classics* 版を用い、*Life* と記す。その他の出典についてはそのつど文中に明記する。

無知は「欠如」、あるいは「魂がよどんで動かなくなった虚無の状態」のことであり、その原因は「心の墮落」である。上の引用はこのように要約できるが、それを敷衍することが許されるなら、知識欲は魂の渇き、知識の獲得は魂の活動、魂の充足、そして幸福は、魂が充足した状態、または精神が広い視野を楽しんでいる状態と言える。すなわち、ジョンソンは、知識の獲得を、深い精神的な営みと理解しているのであるが、興味深いのは、無知の原因を「心の墮落」に見ることで、知識の獲得を、本質的な意味で、倫理的な行為と見なしている点である。

ジョンソンにとって知識欲は「自然な願望」「生まれもった感情」なので、幸福になるために知識の獲得に努めることが倫理的に求められている、というのは、そのままでは釈然としないかもしれない。しかし、彼の著作では、自然な流れとしての知識欲よりも、それをせき止める力としての「心の墮落」の方が圧倒的に多く描かれている。真の知識の獲得、真に広範な精神の視野の獲得は、心の墮落と闘うことなくしてはおぼつかないのである。知識を求めることは、ジョンソンにとって、人間性のあり方と無関係ではない。何が学問の成就を妨げるのかは、知識の獲得にさいして、心はいかに墮落するかという問題に等しいのである。

小論では、道德の体系を築くよりは、読者に教訓を示すことを第一の目的としたジョンソンの著作から、彼が描く心の墮落の諸相と、彼の戒めと教訓を、その人間性への洞察もふくめながら、できるだけ分析的に再構成してみたい。その手掛りとして、まずはじめに重要なのは、彼の才能観の確認である。

1. 才 能

ジョンソンの『英語辞典』(*Dictionary of the English Language*, 1756) を引くと、才能 (genius) は、「精神的な力、もしくは能力；自然、傾向」(Mental power or faculties. Nature; disposition) のほかにも、「誰もが何か独自の仕事をなしうる自然の傾向」(Disposition of nature by which any one

is qualified for some peculiar employment) と、明らかに何らかの意図がこめられた定義が下されている。それが何を背景とし、何を目的としたものなのかは、彼の著作に散見する、ある才能観の批判に追うことができる。それは、「人はそれぞれある目的にとくに合うように造られた心をもって、特定の目的を執拗にもとめつづける願望をもって生まれてくる」(R. 43. 2, III. 232) という支配的感情説 (ruling passion) にもとづいて、「どんな学問にも、ある思想を容れて他を排斥するのに適した、特殊な才能と精神構造が必要」(R. 25. 11, III. 139) であるとする、多分に排他的な才能観である。支配的感情説は、ジョンソンの時代では、ボリングブルックの思想に触発された詩人アレギザンダー・ポープが、『人間論』(Essay on Man, 1733-4) の中で表わしたものが有名なので、ジョンソンが『ポープ伝』(Life of Pope, 1781) で詳しく要約したものを参照しながら、彼の批判を検討してみたい。

それによると、支配的感情とは、ある特定の対象に本来的にむかう願望のことで、人間の全行為に一定不変の傾向を与え、人生全般に公然と、または、副次的な傾向の介入でより隠微に作用する生来の愛着のことである (Pope, AMS Press, vol. 8. 293)。この説にしたがえば、才能は、生来の傾向と同じように、ある特定の対象を不可避的に志向する生来の能力であると言える。が、もしそのように才能を定義した場合、その才能観の行きつくところはどこか、いや、そもそも支配的感情説とは何か、をジョンソンは問題にするのである。彼に言わせると、才能を固定的な生来の能力と定義することは、有害無益である。なぜならこの説にしたがえば、「自分が追及している学問に適さない才能をもちあわせた者は、いかに努力しても虚しく徒勞で、あたかも水と油を混ぜ合わせるように、……むだ」(R. 25. 11, III. 139) だからである。もし才能が適さないなら、どんなに努力しても実をむすばず、またもし人間の資質に変化も成長もなく、何をもってしてもそれは変わらないとするなら、そのような思想の根底にあるのは、ジョンソンの考えでは、精神の自由を奪う機械的な運命論である。そういう説は、頭だけで捏ね上げた空論で、事実と経験に反している、とジョン

ソンは批判するのである。

ジョンソンは、人間の支配的傾向 (predominant inclination) のように見えるものは、経験的に分析していけば、つねに何かに影響され、成長し、変化していつているのが分かるので、決して生まれながらに定まっているものではない、と考えている。「人間はたしかに名声、金銭、権力などへの支配的傾向に長く影響されているように見えることが頻繁にある。が、自分の過去をふり返って、その考え方のもとをたどってみれば、その強い願望は何らかの実例か教え、自分がおかれていた環境、最初に深い印象をうけたもの、はじめて読んだ本、または最初に親しくなった仲間、の影響であることが分かる」(Annotation of Crousaz, *Commentary on Pope's Essay on Man*, 1739; Oxford Authors, 92) と彼は言う。もちろん、人生の初期に被った影響をそのまま継続していく人もいるであろうが、成長とともに大きく修正する人もいるはずであり、まったく新しい性格に替える人もいるはずなのである。人間は人生の諸段階でさまざまな影響にさらされ、さまざまな可能性と向き合いながら生きていくからである。

ジョンソンの考えでは、人間の性格がすべて生来の支配的感情の無修正、無変化の発現ならば、その支配的な性格は、人間が考案した価値観とは別なものを願望の対象としなければならない。たとえば、誰々は生まれつき金銭を愛する、などというが、厳密な意味でそういう生来の愛着は存在しない。なぜなら金銭は人類の考案物であり、生まれながら金銭の何たるかを理解している人などありえないからである。また道義的な意味で、生まれつきの愛国者も存在しない。なぜなら社会は政治的に統制された共同体であって、自然な状態とは区別される状態だからである。また一国の福利となる国家的な利害の統一に心をくたくことは、思索と探求でそれが理解可能になった人にしかできないことなのである (*Pope*, AMS Press, vol. 8. 293)。つまり、正義、博愛、慈善心、愛国心などは、生まれもった感情では決してなく、社会的な教育を受け、精神的な成長をとげて、はじめて理解できる高次元の感情なのであり、現に多くの有徳者がそのような感情を衷心か

らいただいている以上、生来の支配的感情説は真実ではない、彼はそう言いたいのである。

ジョンソンは、支配的感情説を虚偽であると断定するだけでなく、そのような説を唱える動機そのものも批判している。

この説はそれ自体が虚妄であるばかりでなく有害でもある。その傾向としては、一種の倫理的な運命論、すなわち抵抗のかなわぬ生来の支配的な性向への信仰、を生む。これを認める者は、気紛れと偶然がかき立てるいかなる欲望も受け入れる気だし、その"支配的感情"の抵抗しがたい力に従うことは、自然の合法的な支配に服すことにすぎない、と身勝手に信じるつもりなのだ。(Pope, AMS Press, vol. 8. 293)

つまり、支配的感情説は、倫理的に言えば、欲望の虜^{とりこ}となった者が、自分の意志の薄弱さ、無力さを正当化する厚顔無恥な言い訳となりうるし、学問や知的努力という点から見れば、成功者を目してすべてを生来の才能のたまものとし、逆に、現に自分に才能のないことは、努力しないことを正当化する格好な言い訳となる。ジョンソンは、そのような説は腐敗と怠惰に導きやすい有害な思想だというのである。これは道徳家、教育家としては、正当な主張であろうと思われる。生来の感情や能力に対して意志も努力も力を及ぼしえず、生まれもった感情と能力がその後のすべてを決定するという思想を容れるならば、おそらく人間には向上も発展もありえないだろうし、人格の完成や大器晩成などは寝言にひとしい徳目となる。それはジョンソンの断固として拒むところなのだ。このように支配的感情説を背景にして考えた場合、怠惰は倫理的な罪であるという考え方が、自然な筋道として現われてくる。ジョンソンの思想は、そういう信念に貫かれているのである。

ジョンソンが、『英語辞典』で、才能を「誰もが何か独自の仕事をなしうる自然の傾向」と定義したのは、才能を運命的に固定するのではなく、万人に開かれたものとして記すことが目的だったとすることができる。『英語辞典』だけでなく、ジョンソンの著作を注意して読めば、彼はつねに未知

の可能性を認める立場を堅持しようとしていることが分かる。たとえば、才能を生来の固定的な能力と考える者には、「才能とは、何であれ、火打ち石の火花のようなものなので、適当な主題とぶつかってはじめて開く。だから、自分の能力が幸いに自分の願望と一致しているかどうか、試してみるのが万人の務めなのだ」(R. 25. 13, III. 139) と言う。ジョンソンにとって、才能は、勤勉な者にはつねに開かれた、獲得可能な能力なのである。

2. 偶然の関与

しかし、このような疑問が生じるかもしれない。ジョンソンが言うように、人間は何らかの実例か教えに影響されるのだとしても、実例も教えも一つではなかったはずなので、なぜ A の実例と教えに影響されて、B の実例と教えには影響されなかったのか、またなぜ A の環境には影響されて、B の環境には影響されなかったのか。やはり特定の影響をうけやすい生来の支配的傾向が影響に先立って存在している、と考えなければならないのではないか。そしてもし傾向が影響に先立って存在しているとすれば、その傾向がさらに進むことはあっても、傾向の方向性は変化しない。したがって、傾向は一定不変なのではないか、と。

ジョンソンの著作に即して、この疑問に逆に反論するなら、彼はこの議論に含まれている結果論を批判しているのだと言える。つまり、A の実例と教えに影響されたのは、そうさせる何かがあったはずだという想定に立つ、結果を説明するための原因探しである。そのように結果から見て直線的に原因を求めようとする心理が、事象のうちにある種の連続性と思われるものを想起させ、それが生来の傾向や運命のように印象づけられて、しだいに実体のように思われていく。ジョンソンの言葉でいえば、「印象を信頼していると、人間は次第に印象にとられるようになり、最後には印象に左右されて、自由な存在でなくなる。あるいは、実際は同じことだが、自由な存在でないと考えるようになる」(Life, 1159; 傍点は Boswell)。過去を振り返ったときに見えるように思われる事象の連続性は、ジョンソンに

言わせれば、想像力の産物であり、Aの実例と教えに影響されたのは、つきつめて言えば、偶然の結果なのである。任意の行為は先行する事象に何らかの意味で影響をうけるかもしれないが、その影響の結果は不可避的、強制的ではない。最終的な決着は、偶然になされる、と彼は言う。

ジョンソンは、機械的な運命論を排斥するために、偶然の関与を強調する。たとえば、

知識はつねにふえることを願う。それは火のようなもので、はじめは何か外的な力 (some external agent) で点されるほかはないが、あとは自然に燃えひろがっていく。(The Letters of Samuel Johnson; Oxford, I. 270)

と、外的な作用因によってはじめて内的な願望に形が与えられることを示唆する。また職業の選択については、

人生は長くない。だから人生いかに生きるべきかなど、つまらぬ思案に人生の多くをついやしてはならない。慎重を期してそんな思案をはじめ、いろいろ細かく考えつづけたはよいが、結局、結論は偶然に任せるほかはない。将来のある生き方よりも他の生き方を正当な理由をもって好むのは、神がわれわれに与えることをよろこばぬ能力を求めることだ。(Life, 368)

と、いまだ無形な内的な願望が、外的な事象を誤りなくとらえることはなく、外的な作用因との出会いは偶然によること、またどんな偶然によるかは、人知では予見できないことを強調する。さらに

物心がついたところに徳望家のすすめで将来の職業を心に決めてしまった人は幸いだと思うことがよくある。徳望家の権威の前では、気紛れなど起こしようがないし、その人の人望の前では、あの方が言うことだ、間違いはない、と頭から信じてしまう。天分に相談するという世間一般のやり方は、その天分がどうしたら分かるのか教えてもらわなければ意味がないといってよい。(R. 19. 14, III. 109)

と、偶然が関与する以上、天分の存在は事前には知りえず、したがって天分を重視するよりももっと大切なことがある、と示唆する。

さらに『カウリー伝』(*Life of Cowley*, 1779)でも、ジョンソンは才能が偶然 (accidents) に開発されることを力説する。幼少のカウリーは、母親の部屋の窓辺にいつも置かれていたスペンサーの『妖精の女王』を読むのが楽しみで、そのため——後年述懐するには——とうとう「取り返しのつかない詩人になった」という。その後でジョンソンはつづける。

そういうのが偶然なのであって、記憶に残っているかもしれないが、ときには忘れ去られているかもしれない。しかし、それが心に特定の指示をうみ、ある一定の学問や職業への傾向をもたらす。これが通例才能と呼ばれる。真の才能とは、大きな一般的能力が、偶然にある特定の方向に固まった精神のことである。(Cowley, AMS Press, vol. 7. 1-2)

才能は、ある種の不分明な、潜在的な能力であるが、特定の方向に運命的に定められているものではない。もしカウリーの『妖精の女王』との出会いを「運命」と言い、それによって彼の天与の才能が目覚めたのだと言うとしたら、それは、ジョンソンの立場から言えば、多くの偶然から符合するものだけを選んで、「運命」と呼ぶようなものである。それは人生の解釈としては面白いかもしれない。しかし、真実ではなく、想像力が描くドラマなのである。ジョンソンに言わせれば、われわれは偶然に散った火花を、事後において才能と称し、事後において運命と美化しているにすぎない。だが、若い学徒には、どんな偶然で才能が開花するのか未知なのだから、才能の存在は一つ一つ試してみなければ確認できない。しかし、——ジョンソンは忠告する——いつまでも偶然の切掛けを探して人生をむだにするのは賢明ではない。同じ偶然の切掛けなら、早い方の切掛けをとるべきで、あとは努力するのみである。どんな道でもそこで努力をつづけることが才能を築くことにつながる。この意味では、才能は、刻苦精励のすえに自ら獲得する適性の^{いい}謂である。だから、肝心な努力への意欲をかき立てない才能

論は、無意味なだけでなく、有害なのである。ジョンソンの才能論を要約すると、およそ以上のようなになる。彼の論点は、結果的に見た、生来の、運命的な、実体としての才能の否定から、未来を確実に切り開く手段として、努力と勤勉を奨励する方向へむかう。

3. 努力と勤勉

では、努力は一様に才能を開花させるのであろうか。同じ努力をしても、人によって能力は異なるはずだから、大きく開花する人もいれば、目立って開かない人もいるのではないか。この疑問に対して、ジョンソンの著作からは二通りの答えを導くことができる。文脈が違うところで彼が間接的に記している内容にもとづけば、答えは否である。同じように努力しても、資質の違いによって育つ能力は一様でない。彼の言葉で言えば、「人間の精神構造の違いにはそれぞれの強みと弱みがある」(R. 43. 5, III. 233) ので、「大きな仕事にむいているものもあれば、小さな仕事にむいているものもある」(R. 43. 6, III. 233)。たしかに能力に大小はあるだろうし、性質もさまざまであろう。それはジョンソンも否定しない。しかし、興味深いのは、読者を直接戒めている箇所では、ジョンソンはそういう立場をとらない、いや、とるべきではないと主張しているように読めることである。たとえば、彼は言う。歴史上の人物の遺物を珍重したり、アテネで古代の哲人を偲ぶなど、私には何の役に立つのかと思われる。「彼らと同じくらい努力したら、同じくらいの名誉があると信じて、また励むのでなかったら」(R. 83. 9, IV. 74) と、努力と勤勉の絶対的な価値を力説するのである。支配的感情説を、虚偽であるだけでなく、努力への意欲を殺ぐ^そという意味で有害だと批判したように、努力が報われない可能性を示唆することは、やはり有害であり、排すべきなのだ。ジョンソンは、同じ努力は同じ名誉を得るか、さもなければそれぞれに名誉があるという立場をくずさない。ほかの例も引いてみよう。

だれも自分で自分に能力を与えることはできないし、授かった能力をのばせる者も数少ない。しかし決して届くことはないとはいえ、つねに理想をかかげて、それにむかって邁進することはよいことである。(A. 85. 18, II. 416-7)

……自分の勤勉で代々の学問や幸福の総計に何かを加えようと励むことは万人の務めである。多くを加えることは、なるほど少数の人の業であろう。しかし、いかに少なくとも、何かを加えることは、だれもが望んでよいことである。正直に励んでいれば、どんなに失敗つづきでも、最後にはきっと報われるはずだから。(R. 129. 13, IV. 325)

^{いのち}生命は神に対して従順に用いるべく人間に預けられただけなので、神が見るのは、人間の成功ではなく、努力である。そう考えれば、つまらぬ昂揚や落胆を免れ、^{いちず}一途に、陽気に、批判にもめげず、酷評にも怖じ気づかずに進むことができたであろう。(R. 127. 11, IV. 315)

たしかにどんな勤勉も成功を確実にするわけではない。どんなに速やかな出世でも死が掠め取ってしまうかもしれない。が、正直な事業の遂行を前に斃れた人は、^{たお}少なくとも兵列をはなれずに斃れたという名誉を受ける。彼は勝利こそ逃したが、立派に闘ったのだ。(R. 134. 10, IV. 349)

努力と勤勉は人間の義務であり、誠実にはたしていれば必ず報われる、とジョンソンは説く。もし報われないことがあるとすれば、それは死が立ちはだかったときだけである。しかし神が見るのは努力であるから、たとえ死が立ちはだかったとしても、その努力はむだではない。問われているのは、偶然の関与にさいし、いかに判断し、いかに意志し、いかに励むかである。したがって才能の有無は問題とされない。「もてる能力のすべてをたゆみなく発揮している人は、だれでも自分自身にかんして偉大なことをなす」(A. 131, II. 480) と、それぞれがそれぞれの形で必ず報われるはずである、と彼は言う。だから——実際は届くことがなくとも——目標を高く掲げて進むべきである、と彼は奨励する。そして、ジョンソンの著作から読

み取れるかぎりでは、そのような努力と勤勉を背後から支えている力は、決して才能の自覚ではない。ジョンソンにとって、それは信じることである。自分自身の努力と、それをみそなわす神の存在を信じることである。彼は言う、「宇宙の統治者に認められることを励みとする人にとって、克服しがたい困難などはない」(R. 44. 9, III. 241) と。永遠不動の目標を定めて、ひたむきに努力を重ねる人に、報われないことなどありえないと、ジョンソンは言明するのである。

4. 墮落の諸相

努力は信じることなしにはできない行為であるが、信じることは一人一人の心の問題であるために、慢心、逃避、安穩、怠惰など、さまざまな人間的な愚かさ、弱さが生じる原因となりうる。ジョンソンは、努力のみが自分のものといえる行為で、それは必ず報われると言う。しかし、どんなに強靱な知性の持主でも、そういう事実には盲目で、才能をたのみ、妄動にはしって、怠惰に陥る危険がある。ジョンソンが描いている、学問において宿願をはたせない人は、みな何らかの意味で自分の才能を信じ、そのため自分自身を見失って、持続的な努力を怠ってきたか、現に怠っている人である。ジョンソンは、才能の過信が陰に陽に助長している彼らの性情と心理を解剖しながら、読者への教訓にしようとしている。これからその例を見ていきたい。

才能をつよく自覚する者がいだけ極端な過ちは、自惚れである。彼らは「自分を観察するときに誰もがのぞく自惚れ鏡 (complacency)」(R. 43. 7, III. 233) のせいで、自分の力を実際以上に偉大だと感じ、途方もなく遠大な計画を立て、しかもいい気になって早々と成功を信じてしまう。当然、教訓や戒めは顧みるに値しないと考え、だれでも講じておく安全策やまさかのときの非常手段をばかにし、既成の方法、通常の手段で目的をとげるなど、沽券にかかわると思う。自惚れは己を知らない盲目の最たる例なのである。ジョンソンは、彼らがたちまち現実の困難につぶされ、無気力に沈

んでいく様を、おおよそつぎのように描いている。

彼らの戦いの決意が敵の攻撃の激しさに耐えることはまずないといってよい。予期していない反撃に出会えば勇気はくじけ、はじめの勢いはいつのまにか無気力にかわる。失敗におびえて新らしい希望をもてず、改めて挑戦するなど苦痛の極みなのだ。だから意識は自然に愉快なものに向かい、楽しみと娯楽に心はなれて、はじめの企てをすこしずつ忘れ、ほかの仕事ばかり考えるようになる。ときには前と同じような熱意が湧いて、今度はきっと成功すると望みをかけるが、またしても苦い失望を味わい、絶望に追い込まれる。(R. 43. 8, III. 234)

また、自惚れは若輩につきものである。青春はたしかに進取の気性にもえ、大志をいただく時期である。しかしまだ敵と力を比べたことがないので、当然、己を過信しがちで、どんな邪魔物もわが前には道をあけると信じている。逆上せ上がった若者は、最初の敗退で分別を学ぶどころか、ますます血気にはやる。こつこつと努力をつづける者を、臆病者と鼻で嗤^{わら}い、炎のような勢いでさっさと事を成就すべく、困難を一気にねじ伏せようとする。彼らが苦い経験を経て哲学を学び、自分の無力に気がつくには時間がかかるのだ。(R. 111. 2, IV. 226-7)

大事業をなすのに必要なのは「根気と粘り強さ (steadiness and perseverance)」(R. 43. 9, III. 234) であり、自惚れて性急に事をおこすことは、偉大な目的には命取りなのである。が、幻のごとき才能におぼれ、そういう事実盲目なのが、自惚れの自惚れたるゆえんなのである。

自惚れと対照的なのは小心 (timidity) であるが、ジョンソンはそれを「もっと根深い致命的な心の病 (a disease of the mind more obstinate and fatal)」(R. 25. 9, III. 138) と呼び、自惚れよりも始末に負えないと言っている。なぜなら自惚れは苦い経験を重ねて、よき忠告をえれば制御できるが、小心は、いったん克服しがたいと思いついたが最後、どんな障害にも本来はない力を与えてしまうことになるからである。勝利の見込みがないものには、全力をつくすことも、粘り強く努力することもありえない。自

分の力を試そうとしなければ、はじめの恐怖が根も葉もないことだったと気づくこともない。「小心は大仕事の前で尻込みし、困難を不可能と取り違えてしまう」(R. 25. 7, III. 137)。

自惚れ屋の絶望は無気力と怠惰に終わるが、ジョンソンの見方では、小心も結果的には怠惰な状態と変わらない。小心も怠惰も困難に近づいてその真の姿を見ようとしないからである。ジョンソンは言う、「怠惰で臆病な者は、敵を見ずして悲観し、負けることを恐れて闘わない」(R. 83. 7, IV. 73)、「困難の生みの親は、大抵、怠慢であることが分かる。行く手をさえぎっていると見える障害は、実は幻にすぎない。怖がって、そばへ行って確かめてみないから、本物だと思ってしまう。やってみないうちは、いつまで根気がつづくか、不屈の努力でどこまでできるか分らない」(R. 129. 11, IV. 324) と。

豊かな能力に恵まれていることは、それ自体はよいことなのかもしれない。しかし、ジョンソンの著作では、能力の豊かさそのものが困難な仕事に立ちむかうことを妨げている例がたびたび描かれている。多能な人間に対してジョンソンが警告するのは、いろいろなものに手を出しすぎて、結局、何一つ極めることができず、人類の役に立てないことである。これは「造化の神がごくやさしい条件つきで、技量と知識を獲得できるようにしてやった者たちの陥りやすい愚行」(R. 19. 13, III. 108) だとジョンソンは批判する。彼らは視野がひろく、想像力が旺盛で、色々なことを思い巡らすのが、優柔不断で移り気な場合が多い。自分の思想を行動の限界内にとどめることができず、人間存在の全景をたえず逍遥して、その結果、いつも新たな楽しみに巡り合ったと考え、新しい幸福の可能性に手を染めては、所願の成就を遅らせてしまう (R. 63. 8, III. 337)。

目的を遅れさせるだけではない。彼らの旺盛な好奇心は、往々にして無意味な対象をもてあそぶ。ちっぽけな楽しみと瑣末な研究にとらわれて、安易な道と新奇なものに魅せられ、見掛けだけ華奢な学問に心をうばわれ、墮落していく。結局、「何かをしなければならない必要性と、多くのものと格

闘しなければならぬ恐怖が、歴史家を系図学者に、哲学者をジャーナリストに、数学者を目盛盤製造者に墮落させた」(R. 103. 9, IV. 187) のだと彼は戒める。

ジョンソンは、才能が豊かで想像力と好奇心にとむ者と、能力は平凡だが嘗々と努力する者を対照的に描くことが多い。多能な人間は際限なく計画を変更して多忙をきわめ、昂揚と悲嘆をくりかえして人生を送る。「しかし、もっと知性の鈍い人は、泰然とした精神で一点を永遠に見据え、父たちが、祖父たちが歩いてきた、平坦な踏みならされた道を歩んでいく」(R. 63. 8, III. 337)。多能な人間は、そういう「一点を目指し、全力を傾注して、ひた向きに努力を重ねる足のおそい相手に負けてしまう」のである (R. 19. 13, III. 109)。

また、いったん成功した者が怠惰に陥る危険も描かれている。

よくあることだが、一度称賛を博した者は、努力を怠ることが多い。……成功して自分の能力に自信をもった者は、とたんに怠惰の特権として求め、ライヴァルが少しずつ進歩するのを見下して、また力を奮えばいつでも追い抜けると高を括る。しかし長く安楽に耽ると、注意力は散漫になり、規則正しさがなくなる。一度勤勉から怠惰に沈んだ者が、倦怠から抜け出し、忘れかけた思想を蘇らせて、心にふたたび好奇心の炎を点し、以前の情熱をもって学問の苦役に携わるのは、容易なことではない。(R. 111. 8, IV. 229)

では知識の獲得に十分な時間をもつ者はどうであろうか。ジョンソンは、ストア派の隠者によくみられる知的病に警戒せよという。なぜなら、真理に憧れる者、必ずしも知を追及していないからである。安心して、空想に耽っているのを、われわれは深い瞑想と勘違いしている場合が多い (R. 89. 3, IV. 105-6)。知を生業とする者、とくに書齋で深遠な問題に心を沈めようとする者にも、同じような陥穽があるとジョンソンは警告する。書齋人は心を過去と未来に遊ばせ、勝手なことを思い描いて日々をおくる危険がある。部屋にこもって、だれにも邪魔されることなく空想にふけると、新

世界が幻出し、イメージがイメージをよんで、楽しい思いが手に手をとって踊りまわる。これは人に見咎められることも、叱責される恐れもない。こういう惚けた状態、「この習慣となった微睡み (this habitual drowsiness)」(R. 89. 5, IV. 107) は、やがて阿片中毒のように深くなって知力を鈍らせていく。ジョンソンはこのような知識人を「かかる知の偽善者 (these hypocrites of learning)」(R. 89. 5, IV. 106) と呼び、そのような心理を「この見えざる心の暴動 (this invisible riot of the mind)」(R. 89. 4, IV. 106), 「存在のこのひそかな放縦 (this secret prodigality of being)」(R. 89. 4, IV. 106) と呼んでいる。

また、いつも空想にふけて、阿諛便佞^{あゆべんねい}の輩^{やから}としか話をしない者は、人との競争を嫌い、反駁に傷つき、真実の峻厳さを恐れる。少しでも反論にあえば気を悪くし、少しでも制約をうければ逆上し、少しでも困難に出会えば途方にくれる。これまで自分の機嫌にかなうものしか見てきていないため、自分の卑小さを忘れ、世界は自分の言いなりであって、自分を喜ばせてくれるためにあると思違いするのである。(R. 74. 7, IV. 25)

知識の獲得には多くの障害があるが、ジョンソンは生活の諸義務からくる物理的な制約よりも、人間的な性向と心理から生じる障害の方が根深く、手強いと考えている。その中には、だれでも日常的に、無自覚のうちに経験している心理的な陥穽もある。それを分類すれば、「習慣的な怠惰 (habitual idleness)」「自己愛 (the love of himself)」「希望 (hope)」とすることができるが、実際この三つは分かちがたく結びついている。これらは学問を「崇めると同時になおざりにする」(I. 94. 3, II. 290) もので、無自覚なだけにいっそう危険である、とジョンソンは警告する。

学問は、本来、季節、気候、国、市をえらばず、ほかに何の楽しみがなくても修めることができる。この学問の大きな特質が、実は、学問がなおざりにされる理由のひとつなのである。「いつどこでも同じようにできるものは、日一日と先送りされ、まったくやらなくても、やがて不便を感じなくなり、しまいには別なものに心が向く」(I. 94. 5, II. 290)。そうして習慣

的な怠惰が深く根をはり、やがて掘り返すことができなくなるのである。

学問の成就を目指しながら、日一日と実行を先送りし、明日に希望をたくし、明日がくればまた翌日に希望をたくす。そうして習慣的な怠惰に陥った者の心理はどういうものであろうか。内心^{じくじ}忸怩たるものがあるのだろうか。いや、ジョンソンの観察では、そうでない。彼らはやはり才能をたのんでいる。そして、現実の姿に目を向けずに、いつまでも才能を当てにしているのは、彼らの「自己愛」のせいなのだ。

だれにでも自己愛というものがあるので、自分はそのへんの者より、質も程度もすぐれた特性をもっていると思いやすい。他人に比べてどんなに不利であろうと、自分には目に見えない能力、潜在的な美点がかくされていて、それを秤にかければ、秤は必ず自分の方に傾くはずだと、大抵は想像している。(R.21. 1, III. 115)

自己愛にひたり、才能をたのんで、心の一隅に慢心が生じ、将来の希望に小躍りしている者の心理は、はたしてどんなものであろうか。ジョンソンはこのように描く。

新しい計画を思いついて、それを実行に移す手段をあれこれ思い巡らせているときほど楽しい時間はない。頭の中で計画は進行し、成功し、勝利を収め、幸せの絶頂にある。はじめの計画はどんどんふくらみ、新しい思いつきで成功は確実となり、これまで予想もしなかった重大な発見をしたりする。そうやって準備し、材料を集めているうちに、心は黄金の希望に躍りながら、日一日と過ぎて行く。(R. 207. 2, V. 310)

人は、実行することもないし、しようとも思わない計画に思いを巡らせて、静かに、嬉々として時を過ごしている。(R. 207. 3, V. 310)

われわれは他人より自分の能力を高く買っているだけではない。人には言えない希望を内心にいだいて、だれもやらせてくれない仕事をし、決して届かない高みに達することを夢に描いて喜んでいる。そうして、平凡な仕

事と慰みごとをしているうちに歳月はたち、行動の時はすぎる。目的を眠らせてしまったことによろやく気づいたとしても、自分を非難するのは、自分の心にすぎない。われわれが、どこにでもいる普通の人と同じように、注目もされずに生き、記念碑ものこさずに死んでいくことを、友人や敵は不思議ともなんとも思っていない。彼らはそもそもわれわれがどんな志を掲げたかを知らず、よってそれが成就したかどうか、知るよしもないからである。(I. 88. 5, II. 274)

自惚れ、怠惰、希望は、結局、幻のような才能をたのむことで、心が惑わされている姿である。ジョンソンは「汝自身を知れ」といたるところで訴えているが、真の己を知れとは、そのような迷いを覚ませということである。だれしも困難と向き合うとき、いやでも本当の自分自身を知る。そのときは、才能など幻にすぎないと、ジョンソンとともに頷かざるを得ないかもしれない。ジョンソンはそういう人間の心理も描いている。

いったん実行すると、平静さも自信もなくなり、能力もないのに毎日仕事だけがふえる。困難に当惑し、先の見通しが立たないことにうろたえ、邪魔が入って遅れ、非難を浴びていらだち、だれにも顧みられなくて消沈する。にもかかわらず仕事をつづけるのは、始めたからである。完成させるのは、これまでかけた時間を無駄にしたくないからである。しかし、次第に期待は消えうせ、笑顔は消え、もはや忍耐と気力にすがって、意地になってつづけていくしかない。(R. 207. 5, V. 311)

いったん仕事を始めると、その完成をめざすことが慰めになる。ときには思った以上にはかどり、自賛できる余裕もうまれ、たしかに出来栄えがよいときもある。しかし、概して思想と格闘する仕事は苦痛で、想像していた完成度からはほど遠いところで自ら甘んじなければならぬ。欠陥のみが目につく苦痛と、果たせない願望だけに、苦しむ。(R. 207. 6, V. 311)

才能をたのむ者、心の中のいまだ実現されない自己に夢をたくしている者

は、困難と組み合わせることの何たるかを知れば、たじろぐかもしれない。しかし、そういう者にも、根拠のないプライドはある。だれしも自分の価値に対する評価は落としたくない。力がないからではなく、本気になってやらないからだといって自分を慰めている。自分の無能を認めるくらいなら、意志が薄弱なのだと言う方がましなのである。(I. 88. 7, II. 274)

5. 自己を築く

ジョンソンの視点は、一貫して真の自己に盲目な、あるいは真の姿を直視しようとしないう自己へ向けられている。才能は、いってみれば幻想に等しく、たのみにはならない。その頼りない、実体のない才能に、自己愛と希望ですがりつき、さらに個人的な性癖がからんで、幻想が幻想を呼び、増幅していく。それが自惚れや慢心など程度のはなはだしい場合もあれば、日常の娯楽と慰みごとにかくれた罪のない夢や憧れであったりすることもある。しかし、ジョンソンが力説するのは、心にたのむ能力や希望で大事は成就しないが、たゆまぬ努力 (unshaken perseverance) の結果はゆるぎないことである。一つ一つの仕事はたしかに小さいかもしれない。また出来栄もさほどではなく、苦痛だけがのこるかもしれない。しかし、それでも、仕事を放棄するよりは、つづける方がよい。またつづけるしかない。さもなければ、すべてははじめからなかったに等しい。だが、そのたゆまぬ努力の累積の結果は、ずしりと手応えのあるものとして返ってくる、とジョンソンは言う。

われわれが称賛と驚嘆の眼で見る、人間の業の^{わざ}すぐれた出来栄は、たゆまぬ努力のいかんともしがたい力の結果なのである。採石場の石がピラミッドと化し、遠国が運河でひとつになるのも、こういった努力のたまものなのだ。もし鶴嘴のひと振り、鋤のひと掘りを、全体の構想と最終的な結果に比べれば、その果てしなさにわれわれは気が遠くなる思いがするだろう。しかし、こういった小さな作業の果てしない繰り返しが、やがて最大の困難をも克服し、人間のか弱い力で、山

を平らげ、海を拓く (oceans are bounded) ことにもつながる。(R. 43. 10, III. 235)

才能の開発は偶然になされるが、ジョンソンが学問観の中心に努力と勤勉をすえている真意は、偶然の支配から自由になるためであると言える。才能をたのむことや、いまだ実現されざる自己に夢をたくすことは、決して偶然の盲目的な支配から身を守ることではない。むしろ偶然を当てにする空しい行為である。ジョンソンは、努力の結果だけが自分のものであり、それは「いかんともしがたい力 (the resistless force)」として返ってくると言う。彼のいう努力と勤勉は、他日の成功を夢想することに対して、真の自己を実現する行為だと言える。いや、自己を一つ一つ築き上げていく行為だと言う方が正しいかもしれない。才能が刻苦精励のすえに獲得される適性ならば、そのような才能を有する「真の」自己も、刻苦精励のすえに築かれる自分でしかありえないからである。ジョンソンは精神の自由、意志の自由を保証するために、人間の諸事象に偶然の関与を認めるが、学問の成就是、偶然の力に抗する意志の結果であることを教えている。この点で、ジョンソンの学問についての考察は、人としての生き方を反映させた、きわめて倫理的な考察であると言うことができる。

Summary

An Analytical Reconstruction of the Thought of Samuel Johnson
—— On Learning ——

Yoshihiro Ishii

In his *Dictionary of the English Language*, Samuel Johnson defines 'genius' as 'disposition of nature by which any one is qualified for some peculiar employment'. Clearly his moral intention is reflected in this definition describing genius as some good quality not limited to particular people. We find his motivation for doing it in his attacks on the theory of ruling passion, which claims that we have 'an original direction of desire to some particular object; an innate affection, which gives all action a determinate and invariable tendency (*Pope*, AMS Press, vol. 8. 293)'.

On this theory 'genius' is an innate, determinate and invariable faculty directed to some particular object. But if we accept this definition, argues Johnson, 'to him whose genius is not adapted to the study which he prosecutes, all labour shall be vain and fruitless (*Yale*, III. 139)', because the 'determinate and invariable tendency' of action rules out the possibility of improving ability. The belief he finds at the root of this theory is 'a kind of moral predestination' (*Pope*, 293), which he condemns as harmful to young scholars who need encouragement to work hard.

Johnson considers that the theory is contrary to facts, and erroneous, because a tendency is by no means 'determinate and invariable'. He observes that character is subject to alteration through various influences we receive in life. To prove this, he gives the examples of the love of money, patriotism, and so on. These feelings never result from a natural ruling passion, but from

the education and other influences of the society we live in. And a state of society, he affirms, is entirely different from a state of nature.

From his remarks we can infer his theory against the idea of predestination: the notion of an innate tendency or faculty is imaginary. We are likely to get it when we look back and try to find the cause of action in its preceding events, believing how matters come is unavoidably determined by the matters prior to them. We are then under the impression that events are produced by the direct causation. His criticism stems from an insight into the psychological process of the second-guessing which is involved in forming predestinate ideas. He warns of it by saying, 'By trusting to impressions, a man may gradually come to yield to them, and at length be subject to them, so as not to be a free agent, or what is the same thing in effect, to *suppose* that he is not a free agent' (*Life*, Oxford, 1159; italics, Boswell's).

Keeping this discussion in mind, we notice that Johnson excludes all the hints of predestination from his moral essays and emphasises the key role of accidents played in the choice of employment and the discovery of a spark of genius, etc. He asserts that 'the true genius is a mind of large general powers, *accidentally* determined to some particular direction' (*Cowley*, AMS Press, vol. 7. 1-2; italics, mine).

If an accident is a key factor to determine powers in some direction, young scholars never know for certain whether they have a faculty or not. To find one they have to try all the fields of study. However, Johnson warns them that it is not wise to spend too much time of the important part of life in that way, for it is like expecting accidents to come. Instead he reminds them that 'steadiness and perseverance' are still more important in achieving a great project, because it is only labour and industry that can make the tiny spark of genius bigger and stronger. In this sense, genius is an acquired ability after a long period of industry. In fact, nobody can call the initial spark a sign of

'genius' until they assess their achievement after the project is over, because the notion of genius, as well as that of an innate tendency, is imaginary, and cannot be referred to as real until they can see its result.

In his moral essays, Johnson gives the examples of people who fail in achieving their academic ends for various psychological reasons. In most cases their belief in genius interacts with 'complacency', 'habitual idleness', 'the love of himself', 'hope' and so on. All of these take hold of their mind, and consequently prevent them from pursuing the ends with 'unshaken perseverance'.

The direction of genius may be determined by accidents, to be sure, but to rely on genius or an innate faculty in achieving a great project is like to rely on accidents to do that. Johnson considers that a great achievement is the result of labour and industry. They are the only means to realise the true self, or more properly, to develop the self one by one, because if genius is an acquired ability after a long period of industry, the true self of genius is also the self that we can acquire after a long period of industry. The reason why Johnson places labour and industry at the centre of his precepts on learning is that he intends to give us the surest means to be free from the power of accidents and become the master of ourselves. In this respect, his thought on learning is not only instructive, but also highly moral.